



# 心臓財団 季報

No.203

● 財団法人日本心臓財団 ●  
〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル 835 区-A  
○ Tel 03-3201-0810 ○ Fax 03-3213-3920 ○ e-mail:info@jhf.or.jp ○ http://www.jhf.or.jp/

MAY 10, 2011

## 平成23年度 日本心臓財団事業計画

### ～第59回評議員会・第120回理事会にて決定～

3月28日、東京の学士会館にて第59回評議員会・第120回理事会が開催され、平成23年度事業計画、収支予算について審議し、評議員会において承認され、理事会において可決しました。事業概要は以下のとおりです。

#### I. 研究助成事業

##### A. 個別研究助成

1. 第37回日本心臓財団研究奨励の実施
2. 第2回日本心臓財団入澤宏・彩記念研究奨励の実施
3. 第2回日本心臓財団入澤宏・彩記念女性研究奨励の実施
4. 第9回日本心臓財団若年研究者研究奨励(藤基金)の実施
5. 第9回日本心臓財団・アステラス・ファイザー動脈硬化Update研究助成の実施
6. 第7回日本心臓財団・ノバルティス循環器分子細胞研究助成の実施
7. 第37回日本心臓財団佐藤賞の贈呈
8. 第36回日本心臓財団草野賞の贈呈
9. 第26回日本心臓財団予防賞の贈呈
10. 第7回日本心臓財団小林太刀夫賞の贈呈
11. 第16回日本心電学会学術奨励賞の後援

##### B. 多施設共同研究助成

1. 虚血性心疾患に関する研究
2. 虚血性心疾患と脂質低下療法に関する研究
3. 突然死に関する研究
4. 心房細動に関する研究
5. 慢性心不全に関する研究
6. 急性心不全に関する研究
7. 弁膜症に関する研究
8. 高血圧に関する研究
9. 糖尿病と心血管病に関する研究
10. 睡眠呼吸障害と心血管病に関する研究
11. 心臓外科治療に関する研究など

##### C. 留学・研修助成

1. 第25回日本心臓財団・バイエル薬品海外留学助成の実施
2. 東京海上日動火災保険(株)による海外研究者研修助成の実施

3. 第5回日本心臓財団Cardiac Rhythm Management短期海外研修助成の実施

#### II. 会議・研究会助成事業

1. 第33回美甘レクチャー(日本循環器学会特別招待講演)
  2. 第24回日本循環器病予防セミナー
  3. 第15回日本心不全学会学術集会
- その他、理事会で承認された循環器関連学会

#### III. 啓発事業

1. インターネット「心臓財団のホームページ」関連啓発活動
2. 日本循環器学会との協力事業
  - 1) 病院掲示用壁新聞ハートニュースの発行
  - 2) 市民公開講座の開催
3. 予防啓発小冊子の発行
4. 「ハートの日」活動
  - 1) 健康ハートの日(東京・豊橋・名古屋・岐阜)
  - 2) ポスターの製作配布等
  - 3) 世界ハートの日(大阪)
5. 禁煙推進活動
6. AED・心肺蘇生普及活動
7. 生活習慣病改善プログラム
8. 予防医学のための携帯型心電計普及活動
9. 日本心臓財団メディアワークショップの開催
10. 予防活動団体への協力
11. 日本心臓ペースメーカー友の会事業への協力
12. 日本川崎病研究センター事業への協力
13. トーアエイヨー(株)によるラジオNIKKEI「心臓財団虚血性心疾患セミナー」
14. 月刊誌「心臓」の発行
15. 機関紙の発行

## 第7回日本心臓財団・ノバルティス循環器分子細胞研究助成対象研究者決定

当財団では、ノバルティスファーマ株式会社の協力のもとに、循環器領域における分子細胞生物学的研究の進歩に著しい貢献が期待される40歳以下の少壮研究者育成のため、第7回日本心臓財団・ノバルティス循環器分子細胞研究助成を実施いたしました。

本研究助成に48名より応募があり、下記の10名が助成対象者に決定しました。助成金額はそれぞれ100万円です。

● 選考委員(五十音順・敬称略)

委員長	永井 良三	東京大学大学院医学系研究科循環器内科学教授
委員	伊藤 宏	秋田大学医学部循環器内科学教授
	北風 政史	国立循環器病研究センター心臓血管内科部門部長
	倉林 正彦	群馬大学大学院医学系研究科臓器病態内科学教授
	小室 一成	大阪大学大学院医学系研究科循環器内科学教授
	斎藤 能彦	奈良県立医科大学第一内科学教授
	砂川 賢二	九州大学大学院医学研究科循環器内科学教授
	筒井 裕之	北海道大学大学院医学研究科循環器病態内科学教授
	室原 豊明	名古屋大学大学院医学系研究科器官制御内科学教授
	森下 竜一	大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学教授

### 助成対象者

(五十音順・敬称略)

氏名・所属	研究課題
 <p><b>東 純哉(38歳)</b> 大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学 特任助教</p>	<p><b>腹部大動脈瘤におけるペリオスチンの機能解析と新規治療法への応用</b></p> <p>腹部動脈瘤は血管の拡張に破裂を伴う致死性の疾患です。瘤径が5cm以上の高リスク症例では外科処置による破裂予防効果が証明されています。しかし瘤径が5cm未満の低リスク症例では、破裂する危険性は低いです。やがて拡張し破裂のリスクが高まります。残念ながら現状ではこの瘤の拡大を十分に抑制できる内科的治療法は存在しません。本研究では腹部動脈瘤の拡張期に高発現するペリオスチンという物質に注目しています。ペリオスチンにはいくつかの形態がありますが、あるものは細胞とその足場の接着を剥がし、結果として組織の脆弱性を惹起します。そこで新たにペリオスチンに対する中和抗体を作成し、注射等の手軽な方法で投与することで瘤の破裂を予防する新たな内科治療法の開発を目指しています。</p>
 <p><b>阿部 弘太郎(36歳)</b> 九州大学医学部附属病院循環器内科 医師</p>	<p><b>チロシンキナーゼ阻害薬封入ナノDDSを用いた重症肺高血圧症の新たな治療法の開発</b></p> <p>肺高血圧症は、肺小血管の過収縮とリモデリングにより、肺動脈圧が上昇し、右心不全から死に至る極めて予後不良の疾患群である。近年、チロシンキナーゼ阻害薬イマチニブが肺高血圧症の新たな治療薬として注目されているが、従来の薬剤と同様に臓器障害などの副作用が問題となっている。本研究では、我々が世界に先駆けて開発したナノ粒子タイプの臓器選択的DDS(Drug Delivery System)を用い、イマチニブ封入ナノ粒子の重症肺高血圧症ラットモデルに対する優れた治療効果を明らかにすることである。イマチニブ封入ナノ粒子が、イマチニブ単独と比較して、副作用なく選択的に病的肺小血管に送達され、リモデリング抑制と肺血管拡張による優れた治療効果を示すことを期待する。</p>
 <p><b>柴田 玲(39歳)</b> 名古屋大学医学部循環器内科 特任講師</p>	<p><b>心不全におけるカルレチキュリンを介した脂肪細胞由来因子の役割解明</b></p> <p>近年、ライフスタイルの変化に伴い、肥満を基盤とするメタボリック症候群、動脈硬化などの心血管病を含む生活習慣病は増加の一途をたどり、その病態生理の解明と有効な治療法の開発は最重要課題である。脂肪細胞より分泌されるホルモン「アディポネクチン」は生活習慣病において、その血中の濃度が低下しており、アディポネクチンの増加は、生活習慣病に対して保護的作用を有することが明らかになりつつある。本研究では、アディポネクチンの心不全における役割を検討する。特に、近年我々が同定した新規アディポネクチン受容体「カルレチキュリン」の心不全における役割と、アディポネクチンの治療薬としての可能性を検討する。</p>
 <p><b>曾根 正勝(39歳)</b> 京都大学大学院医学研究科内分泌代謝内科 助教</p>	<p><b>ヒトiPS 血管分化系を用いた血管障害疾患の病態解明と新規治療標的分子の探索</b></p> <p>先天的な異常により血管の障害を発症する患者からiPS細胞を樹立させていただき、そのiPS細胞から血管を作成しその機能や遺伝子発現の異常を研究することで、血管障害の治療のターゲットになる蛋白や診断マーカーを見つけ出そうという研究です。本研究で見出されるのは特定の先天性血管障害疾患の治療ターゲットや診断マーカーですが、今後多くの血管障害性疾患でそれらの知見を蓄積することにより、ヒトの血管障害の共通の分子基盤に迫ることが出来、生活習慣病など他の原因による血管障害とも共通した治療ターゲットや診断マーカーの開発に繋がる可能性も期待しています。</p>



	氏名・所属	研究課題
	<p><b>塚本 蔵</b>(39歳) 大阪大学大学院医学系研究科分子心血管医学 特任研究員</p>	<p><b>心筋細胞特異的c-myc転写複合体構成蛋白質の同定法の開発とその遺伝子発現調節機構の解明</b></p> <p>癌遺伝子として知られ細胞増殖や分化抑制作用を有する転写因子c-mycの転写誘導反応は心筋細胞と他の細胞とで異なり、また心筋細胞の非増殖・非分裂性といった観点からもc-mycの心筋細胞における転写誘導反応は興味深い。そこで巨大かつ複雑な転写複合体を<i>in vivo</i>の状態を保ったまま同定する方法を確立し、c-myc転写複合体の構成蛋白質群を網羅的に同定することで、心筋細胞特異的な転写調節因子を見出すことを目的とする。c-mycによる発現遺伝子制御の違いは細胞特異性を付与し、細胞機能の変化につながる可能性があり、その心筋細胞特異的なc-mycの転写制御機構の解明は心臓疾患の病態を把握するうえで重要な鍵となると考えられる。</p>
	<p><b>内藤 篤彦</b>(32歳) 大阪大学医学部心血管再生医学 助教</p>	<p><b>心不全の病態生理における Wnt シグナル活性化の意義の解明</b></p> <p>加齢は心不全の独立した危険因子であり日本においても高齢者の増加とともに心不全患者数は増加している。重症心不全の予後は不良であり、心臓移植が唯一の根治療法である。我々は加齢したマウスの血中からWntシグナルという刺激をつたえる物質を発見し、この物質が血中で増加することがマウスを老化させることを見出しており、本研究はその物質を阻害する手法を開発することを目的としている。我々が同定した新規Wnt活性化物質は加齢マウスだけでなく心不全モデルマウスでも増加していることから、老化という避けられない生理現象の予防法だけでなく、多くの心不全患者の治療法につながることを期待される。</p>
	<p><b>中津 祐介</b>(32歳) 広島大学医学部医化学 助教</p>	<p><b>プロリン異性化酵素 Pin1 の動脈硬化発症における役割と阻害薬による新規治療方法の試み</b></p> <p>プロリン異性化酵素であるPin1はプロリンの立体構造を変化させることで、蛋白全体の機能を調節するユニークな酵素であり、我々の研究グループはPin1が糖代謝に重要であることを明らかにしてきた。今回Pin1 KOマウスを用いた検討により、Pin1が動脈硬化発症に重要であることを見出した。そこで、動脈硬化発症におけるPin1の役割を明らかにするとともに、Pin1阻害剤により動脈硬化の進展を抑制できるかを検討することで、創薬へとつなげていく。</p>
	<p><b>富 海英</b>(35歳) 大阪大学医学系研究科循環器内科学 日本学術振興会 外国人特別研究員</p>	<p><b>小胞体特異的アポトーシス誘導転写因子 CHOP を標的とした新規心不全治療法の開発</b></p> <p>細胞内小器官の一つである小胞体に過度の負荷が生じると小胞体より細胞死のシグナルが発信される。私たちは、圧負不全心モデルにおいて、小胞体特異的アポトーシス誘導転写因子C/EBP homologous protein (CHOP)の発現が上昇することを見出した。さらに、野生型マウスと比較し、CHOP欠損マウスを用いた圧負不全心モデルにおいて、心筋細胞死の阻止や心機能の回復が確認された。同時に、CHOPが多くのBcl2ファミリーメンバーの発現を制御することを見出した。今後、CHOPによるBcl2ファミリー分子の制御メカニズム、さらには、小胞体-ミトコンドリア連関について検討する。CHOPを介する細胞内シグナルの解明により、心不全治療に対する新規治療法の開発に貢献することが期待できる。</p>
	<p><b>藤生 克仁</b>(37歳) 東京大学システム疾患生命科学による先端医療開発 拠点/循環器内科 特任助教</p>	<p><b>心臓繊維化を決定する新規腎臓由来物質の同定</b></p> <p>腎臓病を持った患者に心臓病が発症しやすいことが知られているが、その機序については、多くが未知である。今回、我々は、腎臓のみで、ある一遺伝子を欠損したマウスを作成したところ、このマウスは心臓病発症の原因の一つである心臓の繊維化が起こりにくいことを見出した。このことは、腎臓が心臓の繊維化に関与していることを示している。このマウスを用いることにより、腎臓のどのような因子が心臓病を引き起こすかを同定することが本研究の目的である。このような因子が同定された場合、新たな心臓病薬の開発に直結する可能性が考えられる。</p>
	<p><b>堀江 貴裕</b>(34歳) 京都大学医学部附属病院探索医療臨床部 特定助教</p>	<p><b>動脈硬化形成過程におけるマイクロ RNA-33 の機能解析—遺伝子改変動物を用いて—</b></p> <p>マイクロRNAとよばれる内在性の20塩基長程度の小さなRNAが遺伝子の発現を精巧に調節し、さまざまな疾患の形成に関わることが最近になり明らかにされてきました。私たちは、マイクロRNA-33がいわゆる善玉コレステロールとされるHDLコレステロールの形成に関わることをこれまでに明らかにしました。今回の研究では、動脈硬化形成の過程におけるマイクロRNA-33の役割を様々な動物モデルを用いて詳細に解析し、その結果を新しい動脈硬化予防法・治療法の開発へつなげたいと考えております。</p>

## 第24回日本心臓財団・バイエル薬品 海外留学助成対象研究者決定


日本心臓財団では日本循環器学会の後援のもとにバイエル薬品株式会社の協力を得て、循環器領域の研究に携わる40歳未満の少壮研究者が海外の研究機関等に留学し、研究を行うための海外留学助成事業を実施しています。今回第24回本事業に31名より応募があり、下記の10名が助成対象者に決定しました。助成金額はそれぞれ300万円です。

● 選考委員(敬称略)

委員長	横山 光宏	兵庫県立淡路病院院長
委員 (五十音順)	笠貫 宏	早稲田大学理工学術院教授
	高本 眞一	三井記念病院院長
	増田 善昭	習志野第一病院内科部長
	望月 正武	武蔵野大学メディカルセンター長

### 助成対象研究者

(五十音順・敬称略)

氏名・所属	留学先
 <p><b>魚崎 英毅</b>(31歳) 京都大学再生医科学研究所 日本学術振興会特別研究員</p>	<p>ジョンズ・ホプキンス大学(米国)</p>
<p><b>研究課題：心筋細胞の多核化機構の解明による新規心臓再生療法の開発</b></p> <p>心筋細胞は生後細胞核が2核になることでそれ以上増殖しないようになっていいると考えられています。本研究は2核化のメカニズムを解明し、2核になった心筋細胞を1核に戻し、増殖できるようにするという新しい心臓再生療法の開発を目指すものです。本研究はジョンズ・ホプキンス大学Chulan Kwon研究室において実施いたします。これまで謎につつまれたままであった2核化のメカニズムを明らかにすべく取り組んでいきたいと思ひます。</p>	
 <p><b>鶏内 伸二</b>(39歳) 京都大学医学部附属病院小児科 助教</p>	<p>シカゴ大学小児疾患研究所(米国)</p>
<p><b>研究課題：遺伝子変異導入マウス戻し交配を用いた先天性心疾患発症の前方視的原因遺伝子の解析</b></p> <p>私はこれまで小児循環器の臨床に携わり、小児の先天性心疾患の発症メカニズムに大変興味を持っています。先天性心疾患は出生児の1~5%に発症し、その発症に遺伝的メカニズムが関与することが認識されています。しかしこれまで明らかとなったものは全体のごくわずかです。留学先は大規模なマウス先天性心疾患の原因遺伝子に関するスクリーニングを実施し、その規模は世界トップです。また隣接することも病院と連携した臨床研究も充実しています。この研究環境のもと先天性心疾患の発症メカニズムを遺伝的、またこれまで私が携わってきた人工多能性幹細胞の手法を用いて解明し先天性心疾患児やその家族のお役に立ちたいと考えています。</p>	
 <p><b>加藤 浩司</b>(38歳) 日本医科大学内科学(循環器・肝臓・老年・総合病態部門)助教</p>	<p>ハーバード大学マサチューセッツ総合病院(米国)</p>
<p><b>研究課題：光干渉断層法、血管内視鏡を用いた不安定プラークの同定、その発症メカニズムの解明</b></p> <p>病理学的見地から動脈硬化のメカニズムを解明しようとする試みは数多く行われている。しかし、臨床的な光干渉断層法(OCT)や血管内視鏡などの血管内診断技術と病理を組み合わせて行っている研究は少ない。マサチューセッツ総合病院は世界で初めて冠動脈に対してOCTを臨床応用した施設であり、最先端の研究を行っている。現在OCTに関する世界規模のレジストリーも始まって、世界各国からOCTの情報が送られ蓄積されている。その情報と血管内視鏡の知識、病理学的な見地を組み合わせ研究を行うことで、不安定プラークの同定や、発症メカニズムの解明に役立つこととなり、将来的には急性冠症候群発症予防につながると考えられる。</p>	
 <p><b>清水 岳久</b>(35歳) 群馬大学大学院医学系研究科臓器病態内科学 医員</p>	<p>コロンビア大学医療センター心血管研究財団(米国)</p>
<p><b>研究課題：光周波数領域画像技術(OFDI)を用いた冠動脈イメージング法の開発と臨床応用</b></p> <p>冠動脈治療領域における大きな課題として急性冠症候群の発症予知が挙げられます。すなわち冠動脈内プラークの不安定性を的確に察知し効果的な冠動脈治療が行うことで、多くの心事故を未然に防ぐものと期待されます。OFDIは新しい画像化技術で、その高い分解能から今まで血管内エコーでは描出不可能であった微細な血管構造をもとにプラークの不安定性を厳密に評価できるものと期待されます。当研究においては、心臓冠動脈用のOFDI機器の開発と改良、および臨床への応用をはかっていきたいと考えております。</p>	



	氏名・所属	留学先
	<p><b>中澤 文恵 (35歳)</b> 理化学研究所発生再生科学総合研究センター 研究員</p> <p><b>研究課題：血管リモデリングにおける血流感知機構の解明</b></p> <p>心臓発生と血管発生は密接に関わっており、血流を促す器官としての心臓に異常があると、血管網の形成に異常をきたします。未熟な血管は血流による力学的刺激を受けて成熟し、動脈あるいは静脈へ分化していきますが、具体的な分化制御機構は明らかになっていません。本研究では、マウス、ゼブラフィッシュおよびニワトリ胚を用いて、とくに血液循環開始前後の時期に着目し、血流を感知して発現が変動する遺伝子群を詳細に解析し、動脈分化を制御するシグナル経路の解明を目指します。留学先のMDCでは臨床応用につながる研究を重視しており、基礎研究で得られた知見を臨床現場へ橋渡しする際に必要とされる技術や考え方も習得したいと思っています。</p>	<p>マックス・デルブリュック・セントルム (ドイツ)</p>
	<p><b>中平 敦士 (33歳)</b> 大阪市立大学大学院医学研究科循環器外科学 後期研究医</p> <p><b>研究課題：大動脈二尖弁に伴う上行大動脈拡大の血行力学的要因の解明および外科治療至適時期の検討</b></p> <p>先天性大動脈二尖弁は、大動脈弁狭窄症と上行大動脈拡大を伴い早期に外科治療が必要となる。上行大動脈拡大の病因は、遺伝学的要因か狭窄弁通過血流による血行力学的要因がまだ明らかでない。近年四次元MRI画像により狭窄二尖弁通過血流ジェットは偏行性であり、二尖弁の形態のsubtypeで大動脈壁への衝突部位が異なると報告された。本研究では大動脈二尖弁狭窄症の患者を対象とし、subtypeと上行大動脈壁の組織学的変化の偏在性の関連を調査する。本研究結果は上行大動脈拡大の血行力学的要因を解明し、subtypeに応じた外科治療至適時期など、治療方針の構築に寄与すると期待される。</p>	<p>ライプツィヒ心臓センター(ドイツ)</p>
	<p><b>西 仁勇 (34歳)</b> 京都大学大学院医学研究科循環器内科学 研修員</p> <p><b>研究課題：動脈硬化性プラーク退縮における単球由来CD68陽性細胞の役割と分子機序の解明</b></p> <p>これまで動脈硬化は進行する一方で、それによってできる動脈硬化性プラークも増大し続けるものと考えられていました。しかし最近になりプラークを小さくし、動脈硬化を治療できる可能性が示されました。善玉コレステロール(HDLコレステロール) が大きな役割を果たしているようなのですが、詳しい機序については分かっていないことも多く、色々と調べる必要があります。それにより、心筋梗塞、狭心症の治療、予防に役立てることができるかもしれません。留学先ではマウスモデルを用いて、プラーク形成に重要な働きをするマクロファージに焦点をあて、プラーク退縮機序を追究する予定です。早く生活に慣れて頑張ってくださいと思っています。</p>	<p>ニューヨーク大学(米国)</p>
	<p><b>西山 知佳 (32歳)</b> 京都府立医科大学医学部看護学科 助教</p> <p><b>研究課題：AEDを最大限に活かすための配置および救急医療体制の構築とその効果に関する研究</b></p> <p>留学先のUniversity of Washingtonがあるシアトルは「世界一の救命都市」と呼ばれています。日本では、目覚ましい勢いでAEDが普及していますが、AEDの詳細な効果検証を行うために必要な記録集計体制は確立していません。そこで、先進地域であるシアトルにおいて、AEDの設置状況と使用実績、心停止患者のmedical record、AED使用時の記録などを調査することで、①AEDの適正配置(費用対効果を含む)、②AEDおよび心肺蘇生教育のターゲット集団の明確化と効率的な普及方法を明らかにし、日本でAEDを有効に機能させるための救急医療体制の構築に反映させたいと思っています。</p>	<p>ワシントン大学(米国)</p>
	<p><b>森 雅樹 (33歳)</b> 大阪大学大学院医学系研究科遺伝子治療学 日本学術振興会特別研究員</p> <p><b>研究課題：マイクロRNAを標的とした心血管病・メタボリックシンドロームの新たな治療戦略</b></p> <p>私は、ヒト組織内に存在する幹細胞を使った再生医療で小児難病を治療することを目標に研究をしています。小児組織は、成人に比べ可塑性や再生能が高いとされていますが、科学的な検証や分子メカニズムの解明の余地があります。小児の高い可塑性は、小児の組織幹細胞が特有の性質をもつことによる可能性があります。渡米後、私は、組織幹細胞とマイクロRNAの役割を解明することを目標に置いています。マイクロRNAは、多彩な生理機能を持つ短いRNAで、遺伝子治療や分子標的治療の有力な対象です。治療標的分子を見据え、組織幹細胞による再生メカニズムを解明し、ヒトでは再生能をもたないといわれている心臓などの重要臓器の再生医療の確立を目指します。</p>	<p>ボストン小児病院(米国)</p>
	<p><b>山田 清文 (33歳)</b> 岐阜大学大学院医学系研究科脳神経外科学 医員</p> <p><b>研究課題：Magnetic resonance imaging(MRI)を用いた頸動脈プラーク性状診断とその臨床応用</b></p> <p>近年、高齢化や脂質摂取量の増加により頸動脈狭窄症による脳梗塞が増加しております。特にプラーク内出血や脂質を多く含んだ不安定プラークが破綻することで脳梗塞を発症しやすいことが明らかになっており、正確なプラーク性状診断法の開発は脳梗塞発症の予防や治療方針の決定に重要です。最近になり、客観的かつ詳細なプラーク性状診断法としてMRIが米国にて報告され、使用され始めております。4月から留学しているワシントン大学の研究室はMRIによる頸動脈プラーク診断のパイオニアです。ここで私はMRIによるプラーク性状診断技術の習得とともに、質的診断だけでなく、PET/MRIなどを用いて「不安定プラークへの炎症の関与」をテーマに機能的診断法の確立も行き、臨床に応用できるべく研究をすすめています。</p>	<p>ワシントン大学(米国)</p>

## 第36回 日本心臓財団 佐藤賞 真鍋一郎 特任准教授が受賞

第75回 日本循環器学会総会・学術集会にて



日本心臓財団佐藤賞は、当財団の故佐藤喜一郎初代会長を記念して設けられたもので、近年循環器領域で顕著な業績をあげ、今後もこの分野で中心的な役割を果たすことが期待される50歳未満の研究者1名に贈られるものです。日本循環器学会会長を委員長とする選考委員会において選考され、今回は東京大学大学院医学系研究科循環器内科学の真鍋一郎特任准教授に決定しました。第75回日本循環器学会総会・学術集会(会長:小川聡 国際医療福祉大学三田病院病院長)が東日本大震災の影響で延期となったため、授与式は行えませんでした。賞牌ならびに250万円が贈呈されました。研究課題は、「心血管・代謝・腎疾患に共通する基盤病態である慢性炎症の解明」です。

## 第35回 日本心臓財団 草野賞 中村元 特任助教が受賞

第36回 日本脳卒中学会総会にて



日本心臓財団草野賞は、当財団の故草野義一初代理事長を記念して設けられたもので、この1年間に脳血管障害に関する学術雑誌に掲載された40歳未満の研究者の論文に対し贈られるものです。今回は大阪大学大学院医学系研究科脳神経外科学の中村元特任助教に決定しました。第36回日本脳卒中学会総会(会長:内山真一郎 東京女子医科大学神経内科学)が東日本大震災の影響で延期となり、授与式は来る7月30日に国立京都国際会館にて行われる予定です。賞牌ならびに50万円が贈呈されます。受賞論文は、「Spreading depolarization(皮質拡延性抑制)は脳虚血巣周囲を巡回し脳梗塞を増大させる」でした。

## 第26回 日本心臓財団 予防賞 鈴木一夫部長が受賞

第47回 日循協総会にて



日本心臓財団予防賞は、地域社会に密着し、循環器疾患予防に永年貢献もしくは学術研究開発に功績のあった団体あるいは研究者を対象に贈られるものです。今回は秋田県立脳血管研究センター疫学研究部の鈴木一夫部長が選ばれました。受賞研究は、「秋田県の脳卒中発症登録と健診データを利用した危険因子の解析と応用」です。来る6月3日、第47回日本循環器管理研究協議会(日循協)総会(会長:樗木晶子 九州大学大学院医学研究院保健学部教授)において授与式が行われ、賞牌ならびに50万円が贈られます。

## 第7回 日本心臓財団 小林太刀夫賞 北里大学東病院心臓二次予防センター 保健指導グループが受賞

第47回 日循協総会にて

当財団では日本循環器管理研究協議会の協力を得て、同協議会初代理事長の名を冠した日本心臓財団小林太刀夫賞を授与しています。これは地域と密着して、循環器病を中心とした生活習慣病予防のために長年貢献し、生活習慣等の改善により疾病管理に実効を上げた活動、あるいは予防のための創意工夫により将来において疾病管理の実行が期待できる活動を展開中の保健師、看護師、栄養士の個人または団体に贈られるものです。その第7回には、「地域医療連携ネットワークを基盤とした心血管病患者に対する重症化予防・再発予防活動の取り組み」という受賞テーマで、北里大学東病院心臓二次予防センターの保健指導グループが選ばれました。第26回日本心臓財団予防賞とともに、第47回日本循環器管理研究協議会(日循協)総会において授与され、賞牌ならびに50万円が贈られます。



## 日本心臓財団&シブヤ大学のコラボレーション「心臓学科」

日本心臓財団は、若い世代を対象に月に1回、渋谷区でさまざまなテーマの公開授業を開催しているシブヤ大学と一緒に、「心臓学科」を開催してきました。

今回は昨年12月に開催された第4回「私が救える命がある～救命ワークショップ with AED～」を紹介します。

### 第4回「私が救える命がある～救命ワークショップ with AED～」



第4回「私が救える命がある～救命ワークショップ with AED～」は、講師に、わが国における突然死を防ぐため、自動体外式除細動器AEDの普及に大きく貢献している三田村秀雄先生（済生会中央病院）、そのAEDと胸骨圧迫（心臓マッサージ）の一般への普及活動に現在尽力している石見拓先生（京都大学）をお招きして、若い人たちに突然死とはどんなものか、どうやって助けるのか、AEDを使って救命するのは医師でも救急隊員でもなく、市民であることを熱く語っていただき、実際の救命方法について実演しました。



高齢者によくPPK（ピンピンコロリ）でぼっくり逝きたいという願望を持つ人も多く、そういう意味で心臓突然死は理想的でもあります。本当にいま死んでもよいのでしょうか、と問いかける三田村先生。

突然死は、予期せぬ時に予期せぬ場所で予期せぬ人に起こるもの。そして、心臓発作は決して弱った心臓に起こるのではなく、元気な心臓にも起こる電気系統の故障のようなもの、と説明されました。ですから、故障さえ治せば助かる確率が高く、それを治す器械がAEDなのです。ただし、1分でも早くAEDを使うことが重要で、救急車を待っていては間に合わないこと、だからこそ市民が使い

るように、とてもやさしい操作でできる器械であることを強調されました。

その後、石見先生より、AEDとともに胸骨圧迫（心臓



マッサージ）も重要で、胸骨圧迫で生存率が2倍、AEDを使えばさらにその2倍になると説明があり、石見先生考案の「あっぱくん」と名付けられた箱形の簡易訓練資材を使って、実際の救命法を実習しました。そして、胸骨圧迫は誰にでもできること、人工呼吸は無理にやらなくてもよいこと

（一般の人の場合、人工呼吸をやらなくても救命率は変わらない）をお話しされました。

講義の後には、生徒さんを交えて車座になり、今後、どうしたらこのAEDを使った一般市民の救命行為が増えていくかを話し合いました。

若い人から、人がたくさん集まる場所でもっと気軽に胸骨圧迫を体験することができないか、実際のAEDに触れる機会を増やしたらどうか、など活発な意見を出していただきました。



